

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 陈 帅

論文題目 現代日本語におけるオノマトペの意味拡張
- 「CVQCVri」型を対象にして-

論文審査担当者

主 査	名古屋大学准教授	鷺見 幸美
委 員	名古屋大学教授	玉岡 賀津雄
委 員	名古屋大学教授	靱山 洋介
委 員	大阪大学講師	秋田 喜美

論文審査の結果と要旨

本博士論文は、認知言語学の意味観に立ち、「CVQCVri」型のオノマトペ5語「こつてり」「あつさり」「しつとり」「さっぱり」「すつきり」を対象として実際の使用例をもとに意味分析を行ない、現代日本語におけるオノマトペの意味拡張を考察したものである。以下、本論文の概要と審査結果を報告する。

[本論文の概要]

日本語はオノマトペが豊富な言語とされ、日本語の語彙におけるオノマトペの重要性の高さは広く認識されている。その一方、オノマトペは、形態と意味の間に有契性があることから、一般語彙とは異なる特殊な語群とされてきた。また、オノマトペは五感に根ざすものであるため、その意味の転用は主に共感覚比喩の枠組みにおいて研究されてきた。しかしながら、本論文の考察対象である5語は、感覚を表すだけでなく、感情や性格といった抽象的なことを表す語としても使用される。また、現行の辞典類には記述されていないような用法での使用も見られる。本論文は、日本語の語彙の中で重要な位置を占めながら、特殊な語群とされてきたオノマトペを対象として多義語分析を行い、非慣習的な用法も含めた意味のネットワークを記述することを試みたものである。各語の意味拡張が比喩を基盤としていることを明らかにするとともに、感覚間の転用を共感覚比喩の観点からも捉え直し、共感覚比喩の基盤と方向性についても論じている。

第1章では、考察対象と研究の目的を示している。まず、本論文の考察対象であるオノマトペ5語は複数の感覚を表すが、その使用例には慣習的な用法も非慣習的な用法も見られることを示し、非慣習的な用法も含めて考察していくことが述べられている。次に、オノマトペの意味転用は従来共感覚比喩の枠組みにおいて考察されてきたことを述べ、共感覚比喩について再考することを目的の一つとすることを述べている。さらに、考察対象である5語が五感に限らず抽象的領域にも用いられていることを示し、五感を表す意味との関連性を明らかにすることを目指すことが述べられている。最後に、意味分析にあたって使用するコーパスについて、説明されている。

第2章では、オノマトペに関する先行研究を概観し、本論文の考察対象の位置づけを示している。まず、オノマトペの定義と分類、オノマトペの音韻・形態的特徴と統語的特徴に関する先行研究を概観して本稿の考察対象の位置づけを確認した後、オノマトペの多義性と共感覚比喩に関する先行研究を取り上げている。オノマトペの多義性に関しては、近年認知言語学的な観点からの考察がなされているが、その考察の対象はCVCV-CVCV型が中心であることを指摘している。共感覚比喩に関しては、まず、共感覚を3つのレベルに分けた楠見(2005)において、言語学における共感覚比喩はあくまでも比喩であって疑似共感覚であると述べられていることを踏まえ、共感覚を「ある刺激を受けると同時に、異なる感覚刺激も受ける現象」と再定義した後、共感覚比喩表現には共感覚とは

異なる転用の基盤も考えられることから、その転用の仕組みを明らかにする必要があると述べている。次に、共感覚比喩の方向性に制約があるとする「一方向性仮説」を支持する先行研究と否定する先行研究を取り上げて、共感覚比喩の方向性について検討する余地があることを述べている。

第3章では、認知言語学の意味観を確認し、本論文の分析の立場を示した上で、4章以降での分析に関連する用語の確認をし、多義語分析の課題を示している。まず、認知言語学の意味観として、経験基盤主義と百科事典的意味観について説明している。次に、関連用語として、カテゴリー化とプロトタイプ、二次的活性化を取り上げ、最後に、靱山（2001）で示された多義語分析の4つの課題を確認している。

第4章では、「こってり」と「あっさり」の多義語としての意味を分析・記述し、意味のネットワークを明らかにしている。まず、「こってり」については4つの別義、「あっさり」については5つの別義を認めている。次に、両語とも「味覚」を表す別義1をプロトタイプの意味として認定し、メタファーにより意味が拡張していることを示している。さらに、非慣習的用法を別義から抽出されるスキーマの事例として位置づけ、スキーマを含めた階層的な意味のネットワークを記述している。その上で、感覚内の意味の転用に注目し、その転用はメタファーを支えとしているが、強固な基盤は共感覚であると捉え直している。本章の最後には、「こってり」と「あっさり」の反義関係を確認し、その反義関係の成立は両語の使用の基盤となっている経験の対立によるものであると述べている。

第5章では、「しっとり」「さっぱり」「すっきり」の多義語としての意味を分析・記述し、意味のネットワークを明らかにしている。まず、「しっとり」については5つの別義、「さっぱり」については8つの別義、「すっきり」については5つの別義を認定している。次に、「しっとり」については、「触覚」を表す別義1をプロトタイプの意味として認定し、メタファーにより意味が拡張していることを示している。さらに、非慣習的用法を別義から抽出されるスキーマの事例として位置づけ、スキーマを含めた階層的な意味のネットワークを記述している。「さっぱり」については「触覚」、「すっきり」については「気分」を表す別義1をプロトタイプの意味として認定し、メトニミーとメタファーにより意味が拡張していることを示している。さらに、非慣習的用法を別義から抽出されるスキーマの事例として位置づけ、スキーマと現象素により統合される意味のネットワークを明らかにしている。その上で、感覚内の意味の転用に注目し、その転用はメタファーを支えとしているが、強固な基盤は共感覚であると捉え直している。本章の最後では、「しっとり」「さっぱり」「すっきり」の対応関係が検討されている。

第6章では、第4章、第5章の分析を踏まえて、オノマトペの意味拡張について考察している。オノマトペの意味拡張は、比喩の観点からはメタファーとメトニミーといった比喩を基盤として成立していると説明できるが、感覚間の転用については、共感覚、つまり、複数の感覚による同時体験が転用の強固な基盤であるとしている。さらに、われわれの感覚器官の機能の制約から身体的な同時体験の可否及び一般性が決まり、それが感覚間の転用に制約を与えていることを述べている。

一方で、共感覚比喩の基盤は共感覚だけではなく、共感覚比喩の柔軟性はわれわれの「類似性を見出す」という柔軟な認知能力が関与していると結論づけている。

最終章の第7章では、本論文のまとめを行い、今後の課題について述べている。

〔論文の評価〕

口述試験では、本論文について、審査委員から以下のようなコメントがあり、提出までに必要な訂正と加筆が行なわれた。

- 1) 共感覚比喩の一方方向性仮説に関する検討が不十分である。
- 2) 別義認定の基準が不明瞭で、説得力に欠ける。
- 3) 共感覚を再定義しているが、その再定義がどの範囲に適用可能なのかが明示されていない。
- 4) 援用している概念の理解に不適切なところがある。
- 5) 使用コーパスについて説明されていない。

訂正・加筆の結果、この報告の〔論文の概要〕に書いたような内容となった。本論文のさらに検討すべき点、改善すべき点として、まず、各語の意味記述に関してさらに改善の余地があり、より明瞭で説得力のある記述を目指すべきである。加えて、分析対象語の形態も数も限定されており、オノマトペの意味拡張を論じるにはさらなる研究の進展が望まれる。

本論文は、さらに研究を進めるべき点はあるものの、日本語母語話者の感覚に根付き、意味の分析・記述が容易でない言語表現であるオノマトペを対象として、実例を丁寧に観察し、非慣習的な用法も取り込んだ形でその意味を記述したことには意義があると言えよう。従来のオノマトペの研究では、意味については音象徴的な意味や感覚間の転用の方向性のみ焦点が当てられ、本論文のように個々の語の意味が詳細に分析されていない。また、多義語の意味の記述にあたって非慣習的な用法を意味のネットワークに明確に位置づけている点、共感覚比喩の再考を通してわれわれの言語使用がわれわれの身体的経験を基盤にしていることを検証し、感覚間の転用の制約と柔軟性を論じている点も評価に値する。以上の点で、本論文は、現代日本語のオノマトペの意味研究に対する1つの貢献とみなすことができる。

以上、本論文は、論文審査委員全員一致で、博士学位論文としてその水準に達していると判断した。